



Title	ニヴフ語東サハリン方言の複数標識 -gun について
Author(s)	蔡, 熙鏡
Description	研究ノート
Citation	北方人文研究, 7, 71-81
Issue Date	2014-03-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/55038
Type	other
File Information	jcnh07-04-CHAE.pdf



〈研究ノート〉

ニヴフ語東サハリン方言の複数標識 *-gun* について

蔡 熙鏡

東京外国語大学大学院博士後期課程/日本学術振興会特別研究員

1. はじめに

ニヴフ語は、アムール川下流域とサハリン島の一部地域で話されている少数民族の言語である。古アジア諸語、または古シベリア諸語と分類されることがあるが、系統関係は明らかにされていない。

方言は、大きくアムール方言とサハリン方言に大別され、それぞれいくつかの下位方言に分けることができる。アムール方言の場合は、大陸側のアムール川下流域で話されている「大陸アムール方言」とサハリン島の西海岸で話されている「西サハリン方言」、そしてサハリン島のシュミット半島地域で話されている「北サハリン (シュミット) 方言」が認められ、サハリン方言の場合は、サハリン島の東海岸およびトゥミ川流域で話されている「東サハリン方言」とポロナイ川流域で話されていた「南サハリン (ポロナイスク) 方言」が立てられる (Panfilov 1962: 1, Krejnovich 1979: 296, Gruzdeva 1998: 7, Shiraishi 2006: 10-11)。

ニヴフ語の名詞は、単数と複数に区別され、複数を表すためには、複数標識の *-gun*¹ を付加する方法と名詞語幹を重複する方法が用いられる。定形動詞にも *-gun* が付加され、主語が複数であることを表すことがあるが、義務的なものではない。

定形動詞に付加されている *-gun* の意味機能に関しては、金子 (2010: 46) がアムール方言について「全体が一緒に行動しているときには複数表示になることが多いようにみえる」と記しており、また丹菊 (2012: 117) はトゥミ川流域および河口地域の東サハリン方言² の複数標識について、アムール方言と同じ機能を持つと述べている。

本稿では、ニヴフ語東サハリン方言のテキスト資料から複数標識 *-gun* の形態・統語的なふるまいを調べた結果を基に、目的語に付加されている *-gun* は、主語が複数であることを表すことがあり、その際には配分的な (distributive) 解釈に影響している可能性があることを指摘する。

以下では、まず第2節でニヴフ語の複数標示に関する先行研究を簡単にまとめ、第3節でテキスト資料から得られた用例の分析結果を提示する。次に、第4節で東サハリン方言の複数標識 *-gun* が主語の複数性を表していると思われる例を提示し、配分的な意味解釈との関係について述べる。第5節では、朝鮮語との若干の対照を行い、第6節で

* 本稿の作成にあたって、貴重なご指摘とコメントをしてくださった査読者の先生に深く感謝申し上げます。なお、本研究は、文部科学省科学技術研究費補助金 (特別研究員奨励費; 24・10830) の助成を受けて行われた。

¹ *-gun* は東サハリン方言で用いられる形式であり、それが付加される形態素の末子音によって *-kun~gun~jun~xun* の異形態を持つ。アムール方言では *-gu* の形式が用いられる。

² 丹菊 (2012) では、トゥミ川流域および北部東海岸で話されているサハリン方言の下位方言を「サハリン北部方言」と呼んでいるが、本稿では、「北サハリン (シュミット) 方言」との混乱を避けるために「東サハリン方言」の名称を用いることにする。

は今後解決すべき問題点を示す。

2. 先行研究

アムール方言の文法書である Panfilov (1962: 92) の複数標示に関する記述によると、主語の指示対象が複数である場合、主語と述語の両方に複数標識が付加される場合と、主語と述語の両方に付加されない場合、そして主語と述語のどちらかにのみ付加される場合の4つのパターンがあり得る。また、4つのパターンのうち、どれが選択されるかは文脈によるところがあると述べている。

Nedjalkov & Otaina (2012: 51) は、アムール方言に関して、「複数」のカテゴリーを次のように説明している。

- (a) 単数形は単数と複数、両方の意味に解釈され得る。
- (b) 抽象名詞は複数形を持たない。
- (c) 質量名詞と集合名詞は複数形を取り得るが、複数の意味は持たない。
- (d) 人名や親族名称の複数形は近似複数 (representative plurality) の意味を表す。

一方、丹菊 (2012: 115) は、東サハリン方言の複数標示について「名詞 (可算名詞) が複数の場合は義務的に付加される。動詞の場合はオプションである」と述べており、名詞の複数標示の義務性に関してはアムール方言との間で差が見られる。

- | | |
|-----------------------------------|-----------------------|
| (1) Panfilov (1962: 99) | (2) 丹菊 (2012: 116) |
| <i>imŋ qan əy-d^lyu</i> | <i>*qanŋ ve-d-yun</i> |
| 3PL イヌ 吠える-IND-PL | イヌ 通る-IND-PL |
| 「彼らの犬が吠えた」 | 「イヌが通った」 |

つまり、(1) のアムール方言では主語が単数であっても述語に複数標識が付加され得るのに対し、(2) の東サハリン方言ではそれが許されない。*-gun* は定形動詞に付加されて主語が複数であることを表す機能を持つが、南サハリン (ポロナイスク) 方言に関して述べている高橋 (1942) には、以下のような記述がある。

動詞の複数を表すには、名詞の複数を作る時と同様に、不定法の形に *-kun*、*-χun* をつける。しかし意味さへ通じればなるべく省略するのが普通である。だから、主格と述語とは数の上では必ずしも相應せず、時には、主格は単数でも目的格が複数なるが爲に述語を複数にする事さへある。

高橋 (1942: 49)

つまり、南サハリン (ポロナイスク) 方言においては、述語に付加された複数標識が目的語の複数を表すことがあるようである。高橋 (1942) のこの記述に関連し、丹菊 (2012) は隣接するアイヌ語サハリン方言から影響されている可能性があると指摘している。

3. *-gun* の形態・統語的な特徴

ここでは、筆者の現地調査で得られたテキスト資料と丹菊・パクリナ (2008) を用いて³、東サハリン方言における *-gun* の形態・統語的なふるまいを検討する。分析の際には、まず *-gun* が付加されている語を品詞別に分類した上、名詞は有情物 (animate) と無情物 (inanimate) に、動詞は性質動詞と非性質動詞⁴ にさらに下位分類を行った。分類の結果を表 1 に示す。

表 1: *-gun* が付加されている語の品詞による分類

品詞	用例数	
名詞	有情物	105 例
	無情物	21 例
		(66.0%)
動詞	非性質動詞	55 例
	性質動詞	1 例
		(29.3%)
代名詞	指示代名詞	7 例
	疑問代名詞	2 例
		(4.7%)
合計		191 例 (100%)

3. 1 名詞 + *-gun*

表 1 に見るように、*-gun* は有情物名詞と無情物名詞の両方に付加され得るが、有情物名詞に付いている例が圧倒的に多い。無情物名詞には *haps* 「ハプス草」、*hayr^h* 「樹皮製容器」、*k^hazm* 「カズム罌」、*ɲacx* 「脚」、*c^hɤa* 「お金」のほか、*q^hal* 「氏族」、*q^ha* 「名前」のような物名詞以外の例も見られた。以下にそれぞれの例をあげておく。

(3) 丹菊・パクリナ (2008: 13)

haps-kun *ip-inə-t* *vi-d-yun*
 ハプス-PL 食べる-INT-CVB.3PL 行く-IND-PL
 「ハプス草をとって食べるために行った」

(4) 丹菊・パクリナ (2008: 31)

hu-k^hazm-yun *xici-r^h*
 その-カズム罌-PL 引き上げる-CVB.3SG
 「そのカズム罌を引っ張って」

(5) *hu-c^hɤa-yun-yir^h* *p^he-rɤ* *ki* *ye-ta* *lar^hq* *ye-ta*

その-お金-PL-INS 自分-DAT 靴 買う-ENU.1SG 服 買う-ENU.1SG
 「(私は仕事をしてからもらった) そのお金で自分の靴を買って、服を買った」

³ 丹菊・パクリナ (2008) は、ニヴ出身のヴラディミール・ミハイロヴィチ・サンギ氏が 1970 年代に採録した録音資料の一部を文字化したものであり、語り手はサハリン島東海岸地域出身の女性である。筆者の資料の語り手も、サハリン島東海岸地域出身の女性である。

⁴ ニヴ語では、形容詞と呼ばれる品詞は動詞とほとんど同じ形態論を示す (服部 1944: 53) ことから、形容詞の語類を立てないのが一般的である。つまり、ニヴ語の動詞は性質動詞と非性質動詞に下位分類することができる。

さらに、*-gun* が付加された名詞 126 例のうち 75 例は文の主語である。それらのうち 1 例を除く 74 例は有情物名詞である。

以下の例は、無情物名詞 *ɲacx*「脚」に *-gun* が付いて主語に用いられている例である。

- (6) *in ɲacx-kun kəl-ta ut paq-ta ha-d-ɣun-furu*
 3PL 脚-PL 長い-ENU.3PL 体 短い-ENU.3PL そうである-IND-PL-HRS
 「彼らは脚が長く、体が短かったようだ」

Panfilov (1976: 22) は主格名詞句よりも斜格名詞句の場合に複数標識が落ちやすいと述べている。このことは、主語には有情物名詞が来ることが多く、さらに複数標識が無情物名詞より有情物名詞に付くことが多いということに起因するものと考えられる。また、Panfilov (1962: 113) には、いわゆる近似複数の意味を表している例が提示されている。次にその例を示す。

- (7) Panfilov (1962: 113)
Xevgun-gu ɲarɓo-t vi-inə-dʲ
 Xevgun-PL 罌を仕掛ける-CVB.3PL 行く-INT-IND
 「ヘヴグンたちは、罌を仕掛けるために行く」

(7) の *Xevgun-gu* は、「ヘヴグンと呼ばれる複数の人」ではなく、「ヘヴグンとその仲間たち」という意味を表す。Nedjalkov & Otaina (2012: 50) は、アムール方言において、人の名前や親族名称の複数形は近似複数の意味を表すとしている。次に示す例のように東サハリン方言においても人名や親族名称に付加された *-gun* は近似複数の意味を表す。

- (8) *ətk-ɣun-aɣ tuk-toɣ pʰrʰ-gu-d*
 お父さん-PL-CAUSEE ここ-DAT 来る-CAUS-IND
 「お父さんたちをここへ来させた」

(8) の *ətk-ɣun*「お父さんたち」は「お父さんとその仲間たち」という意味を表す。さらに、数詞は名詞の前に来ることもあれば、後ろにくる場合もあり、どちらの順序も可能であるが、名詞に *-gun* が付加されている例は見うけられない。但し、名詞+数詞の順序では名詞に *-gun* が付加されることがあるようである⁵。

- (9) a. *ɲax raf* b. *taf-kun ɲax*
 6 家 家-PL 6
 「6 軒の家」 「家 6 軒」

⁵ 丹菊・パクリナ (2008) の共編者であるガリーナ・パクリナさんのご教示による。彼女も東サハリン方言話者である。

3. 2 定形動詞 + -gun

-gun は非定形動詞に付加されることはなく、専ら定形動詞にのみ付加される。今回用いたデータでは、表 1 に見るようにそのほとんどが非性質動詞に付加されており、性質動詞に付加されている例は次の 1 例のみであった。

(10) 丹菊・パクリナ (2008: 42)

p^hake fake aw yəl-d-yun
 だんだん だんだん 声 長い-IND-PL
 「(シャーマンたちの) 声がだんだん長くなった」

(10) は性質動詞 *yəl*-「長い/長くなる⁶」に -gun が付加されている例である。さらに、相互的な動作を表す動詞の場合は、定形動詞で用いられた時に -gun を取りやすいという可能性がある。例えば、*var^hk-*「喧嘩する」の動詞は、定形動詞に用いられた 2 例とも -gun が付加されている。次に該当の例を示す。

(11) 丹菊・パクリナ (2008: 35)

ar^hqif-kin k^heq-yin, həmd^ht var^hk-d-yun
 タコ-COM キツネ-COM そういうふうに 喧嘩する-IND-PL
 「タコとキツネはそういうふうに争っていた」

定形動詞に -gun が付いている 56 例のすべては、主語が複数であることを表している。

3. 3 代名詞 + -gun

Panfilov (1962: 235) は人称代名詞の複数形にも複数標識が付加され得ると述べているが、複数標識が付加された場合とそうでない場合との間にどのような意味の差があるかは明らかではない。今回のデータからは人称代名詞に付加された例は見られず、指示代名詞と疑問代名詞に付加されている例がそれぞれ 7 例、2 例確認できた。

(12) 丹菊・パクリナ (2008: 33)

hud-yun t^hunyu-r^h iʃ-d
 それ-PL とる-CVB.3SG 食べる-IND
 「それらをとって食べた」

(13) 丹菊・パクリナ (2008: 33)

nud-yun ye-n iʃ-i-d?
 何-PL とる-CVB.1SG 食べる-FUT-IND
 「何をとって食べる？」

⁶ 服部 (1944: 53) はニヴフ語の形容詞 (= 性質動詞) について「一般に形容詞と稱せられて居る品詞はギリヤーク語 (ニヴフ語のこと; 筆者注) では同時に動詞でもある」と述べ、「大きい」「暖かい」「老いた」「強い」などの語は同時にそれぞれ「大きくなる」「暖かくなる」「老いる」「強くなる」という意味を持つと指摘している。

4. ニヴフ語の配分的複数性 (distributive plurality)

Gruzdeva (1997) は、ニヴフ語には配分的な意味を表す特別な形式がなく、その意味は重複の形態論的な手法によって表されるとしている。さらに、Gruzdeva (2007) は、配分的な複数性の意味を「繰り返される事態は異なる参与者によって同じ時点で行われる」と述べ、ニヴフ語の配分的な構文 (distributive construction; DC) を次の5つの下位タイプに分類している (それぞれの例文は Gruzdeva (2007) に提示されているものである)。

- (14) Actor (= Agent / Experiencer) DC: 行為は異なる行為者によって連続的に行われる。複数形の行為者項と重複された動詞語幹、配分副詞 (任意) で標示される。

keχ-xun sik jan+jan pui+vui-t p^hh-bar-d-yun
 カモメ-PL 全部 一匹+一匹 飛ぶ+飛ぶ-CVB.3PL 来る-PFV-IND-PL
 「すべてのカモメたちが次々と飛んできた」

- (15) Undergoer (= Patient / Theme) DC: 行為はそれぞれの Undergoer において連続的に行われる。複数形の Undergoer 項と重複された動詞語幹、配分副詞で標示される。

əmk ŋirŋ-gun jaqr+jaqr-gur^h zu+zu-d
 母 コップ-PL 一つ+一つ-ADV 洗う+洗う-IND
 「母はコップを一つ一つ洗った」

- (16) Partitive DC: 行為者 / Undergoer は行為によって全体から部分に分けられる。動詞語幹の重複で標示される。

pilkar^h c^ho k^he-roχ j-uŋ-r^h vaχc+vaχc-u-bar-d
 大きい 魚 網-DAT 3SG-入る-CVB.3SG 破れる+破れる-TR-PFV-IND
 「大きい魚が入って、網全体を引き裂いた」

- (17) Instrumental DC: 行為はそれぞれの道具を持って、連続的に行われる。重複された道具項で標示される。

azmceyŋ i-roχ paχ+paχ-kis paz-d
 男の子 彼-DAT 石+石-INS 投げる-IND
 「男の子が彼に石を一つ一つ投げた」

- (18) Locative DC: それぞれの特定の場所・方向と関連する連続的な行為。重複と副詞によって標示される。

tolvət-ŋan q^hotr eri+eri-in c^ho ŋəŋ-r ip-ra... [Panfilov 1962:97]
 夏-CVB 熊 川+川-LOC 魚 探す-CVB.3SG 食べる-ENU.3SG
 「夏の時、熊は (異なる) 川で魚を獲って食べた」

配分的な複数性の定義に関しては、研究者によって違いがあり得るが、上記で示したように Gruzdeva (2007) は、配分的な複数性を「繰り返される事態は異なる参与者によ

って同じ時点で行われる」としている。しかしながら、この意味においても例 (16) が配分的な複数性を表しているのかについては疑問が残る。なぜなら、(16) には「異なる参与者」、つまり複数の参与者は登場しておらず、「繰り返される事態」のみが存在しているからである。

さらに、Gruzdeva (2007) は、複数標識の *-gun* が付加された名詞と定形動詞を両方とも集合的な複数性 (collective plurality) を表すとしている。ところが、次に示す文は重複された要素を含んでいないにもかかわらず、配分的な意味 (Actor DC) に解釈される。

(19) 丹菊・パクリナ (2008: 24)

hud-ɣun, p^hχa-ɣun fur-gavr-d

それ-PL REFL-名前-PL 言う-NEG-IND

「(化物たちが名前を尋ねた時に) 彼らは自分の名前を言わなかった」

(19) の文は目的語に *-gun* が付いている例であるが、配分的な意味を表すとみなされる。「名前」は一般的に一人に一つ持っていると考えられるため、この文を「それぞれの人が複数の名前を言わなかった」と解釈することはむずかしい。*-gun* が付加されていない次の例 (20) も、文脈によっては配分的な意味に解釈され得る。Gruzdeva (2007) によれば、配分副詞の標示は、Actor DC において義務的ではないため、配分的な解釈の可能性がなくなっているわけではない。

(20) 丹菊・パクリナ (2008: 24)

sik p^hχa ətə fur-gavr-ŋə

みんな REFL-名前 正しく 言う-NEG-CVB

「みんな自分の名前を正しく言わなかったので」

(19) の例で注目すべき点は、目的語に付加されている *-gun* が主語の複数性を表しているということである。ニヴ語において、主語の明示は義務的ではなく、落ちることが多いことにも注意する必要がある。例えば、(19) から主語と *-gun* を取り去った文は、文脈によって単数主語と複数主語の両方の意味に解釈され得るが、主語だけを取り去った場合は、普通は複数主語の意味に解釈される。仮に、(19) の主語が以下の (19)' に示しているように単数であるとする、その文は不自然な文になる。

(19)' ? *ni p^hχa-ɣun fur-gavr-d*

1SG REFL-名前-PL 言う-NEG-IND

「私は自分の名前 (複数) を言わなかった」

このことから見ても、(19) の *-gun* が主語の複数性を表していることは明らかである。目的語名詞に付加されている *-gun* が主語の複数性を表すことがあるということは、配分的な解釈にもかかわってくる。なぜなら、配分的な解釈 (Actor DC) は行為者が複数であることが必要だからである。つまり、(19) のように目的語に付加されて主語の複

数性を表している場合の *-gun* は、配分的な解釈に影響を与えるということができる。類似の例は、アムール方言から見出される。

(21) Shiraishi (2002: 32)

paɕla-mur-ku tʰɕə rʰjiv-d
 赤い-馬-PL 上に 乗る-IND
 「(彼女たちは) 赤い馬の上に乗った」

(21) の場合は、主語が明示されていない文であるが、「一人の女性が複数の馬の上に乗った」と解釈するには無理があり、「複数の女性がそれぞれの馬の上に乗った」という配分的な意味に解釈の方がより自然である。

5. 朝鮮語との類似点

ニヴフ語と朝鮮語との間の文法的な類似性は、度々注目されてきた。ここでは、ニヴフ語と朝鮮語の複数標示について、若干の対照を行う。なお、本節で用いられている朝鮮語の例文の文法性と複数標識の解釈については 2 名の朝鮮語母語話者に確認を行っている。

朝鮮語の名詞は、ニヴフ語と同様、単数と複数に区別され、複数を表すために複数標識 *-dyr* を付加する方法と、名詞語幹を重複する方法を用いる⁷。また、複数の標示はオプショナルであり、単数形で複数の指示対象を表すことも可能である。

(22) *saram-‘i mo-‘ie ‘iss-da*
 人-NOM 集まる-CVB ある/いる-IND
 「人が集まっている」

-dyr は、可算名詞にはもちろん抽象名詞にも付加され得ることや近似複数の意味を持たないなど、*-gun* と異なる点もあるが、同じ形式が定形動詞に付加されることがあり、その際には主語が複数であることを表す点でニヴフ語に類似している。しかしながら、*-gun* が名詞句と定形動詞にのみ付加されるのに対し、*-dyr* は文のいろいろな要素(副詞、副動詞など)に付加され得る。

(23) Lee (1991: 81)

ai-dyr-‘i Tom-‘eigei-[] bbang-yr-[] manh-‘i-[] ju-ess-‘e-‘io[]
 子供-PL-NOM トム-DAT パン-ACC たくさん あげた
 「子供はトムにパンをたくさんあげた」

上記の例において *-dyr* は [] のどこに現れてもよく、2 か所以上現れることもあるが、いずれも主語の複数性を表す。下の (24) は目的語名詞に *-dyr* が付いて、主語の複数性を表している例である。

⁷ *jib+jib* 「家+家」のように名詞語幹の重複による方法は、生産性が低い。

- (24) a. *hagsaing-dyr-‘i bab-dyr-‘yr meg-go ‘iss-da*
 学生-PL-NOM ご飯-PL-ACC 食べる-CVB いる-IND
 「学生たちがご飯を食べている」
- b. ? *hagsaing-‘i bab-dyr-‘yr meg-go ‘iss-da*
 学生-NOM ご飯-PL-ACC 食べる-CVB いる-IND
 「学生がご飯を食べている」

(24b) の文は主語が単数になると非常に不自然な文になる。もし、主語が明示されていなければ、(24b) は主語が複数であると解釈されるのが一般的であり、ニヴフ語東サハリン方言でも類似の例が見られる (例 (19))。

ニヴフ語南サハリン (ポロナイスク) 方言では、定形動詞に付いている *-gun* が目的語の複数性を表すことがあるが (高橋 1942)、朝鮮語では定形動詞に付加されている *-dyr* が目的語の複数性を表すことはない。但し、(25) のような例は可能である。

- (25) *sensaingnim-‘i jeija-dyr-‘eigei sur-dyr-‘yr meg-‘i-ess-da*
 先生-NOM 弟子-PL-DAT 酒-PL-ACC 食べる-CAUS-PAST-IND
 「先生が弟子たちにお酒を飲ませた」

(25) において、*sur* 「酒」に付加されている *-dyr* は *jeija* 「弟子」が複数であることを表している。もし、この例文から与格名詞句を削除した場合は、「先生は複数の誰かに酒を飲ませた」という意味に解釈されるのが一般的である。このような、*-dyr* が主語以外の項の複数性を表している例に対して、임흥빈 (2000: 46) は、特に使役表現の文における *-dyr* は、対格や与格名詞の複数性を表すことがあると指摘している。ニヴフ語東サハリン方言においては、*-gun* が主語以外の複数性を表している例は今のところ見つかっていない。

6. おわりに

本稿では、ニヴフ語東サハリン方言における複数標識 *-gun* について、特に目的語名詞に付加されている例を取り上げ、*-gun* が主語の複数性を表すことがあり、それが結果的に配分的 (distributive) な解釈に影響を与えている可能性について論じた。

しかしながら、本研究に用いたデータは、テキスト資料を基にしており、量からしても決して十分とは言えないことから、さらなる調査を要する。ニヴフ語の複数標識の機能を明らかにするために、今後解決すべき問題点としては、以下のようなことがあげられる。

まず、母語話者への聞き取り調査を行い、テキスト調査による本研究の主張を根拠づけられる詳細なデータを集める必要がある。次に、本研究では方言間であり得る機能の違いについては考慮しておらず、複数標示において、方言間で差があるとすれば、方言ごとに調査を行い、それぞれの方言間の用法の差を明らかにしなければならない。さらには地理的に隣接しているツングース諸語やアイヌ語、ロシア語との言語接触の問題も研究には欠かせない大事な問題である。

略号一覧

1/2/3	1 st /2 nd /3 rd person	ENU	enumerative	NEG	negation
ADV	adverbial	FUT	future	NOM	nominative
ACC	accusative	HRS	hearsay	PAST	past
CAUS	causative	IND	indicative	PFV	perfective
CAUSEE	causee	INS	instrumental	PL	plural
COM	comitative	INT	intentional	REFL	reflexive
CVB	converb	ITER	iterative	SG	singular
DAT	dative	LOC	locative	TR	transitiviser

参考文献

Gruzdeva, E.

1997 Plurality of situations in Nivkh. In V. S. Xrakovskij, ed., *Typology of Iterative Constructions*, 164-188. München-Newcastle: Lincom Europa.

1998 *Nivkh*. München: Lincom Europa.

2007 Distributive plurality in Nivkh. Workshop on Nominal and Verbal plurality, 9-10 November, 2007, Paris.

服部 健

1944 『ギリヤーク』東亜民族要誌資料第一号 帝国学士院東亜諸民族調査室.

金子 亨

2010 「ニヴフ語動詞の語形成」『千葉大学ユーラシア言語文化論集』第12号, 41-59. 千葉大学ユーラシア言語文化論講座.

Kreinovich, E.

1979 Nivkhskii jazyk. *Jaziki azii i afriki* 3, pp. 295-329. Moscow: Nauka.

Lee, Han-Gyu

1991 Plural marker copying in Korean. *Studies in the Linguistic Sciences* 21, 1. 81-105

임흥빈

2000 「복수 표시 ‘들’과 사건성」『애산학보』Vol.24, 3-50. 애산학회.

Nedjalkov, V. P., G. A. Otaina.

2012 *Očerki po sintaksisu nivxskogo jazyka*. Moscow: Znak.

Panfilov, V. Z.

1962 *Grammatika nivkhskogo jazyka* 1. Moscow and Leningrad: Nauka.

1976 Tipologija grammatičeskoj kategorii čisla i nekotorye voprosy ee istoričeskogo razvitija. *Voprosy jazykoznanija* 4. 18-38.

Shiraishi, H.

2006 *Topics in Nivkh Phonology*. Ph.D. thesis, Groningen: University of Groningen.

Shiraishi, H. and G.Lok.

2002 *Sound Materials of the Nivkh Language 1: Folktales of V.F.Akiliak-Ivanova*. ELPR publication series A2-15. Suita: Osaka Gakuin University.

高橋盛孝

1942 『樺太ギリヤク語』大阪: 朝日新聞社.

丹菊逸治

2012 「ニヴフ語の複数表示: ポロナISK方言の *-gun* の特殊用法」『北方人文研究』第5号, 113-122. 北海道大学大学院文学研究科北方研究教育センター.

丹菊逸治・パクリナ 編

2008 『フトククさんの昔話と体験談』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.

A Study for the Plural Marker *-gun* in Nivkh (On the East Sakhalin Dialect)

Heekyung CHAE

Graduate student, Tokyo University of Foreign Studies / JSPS research fellow

In Nivkh, nouns have distinct singular and plural forms. There are basically two ways in which the Nivkh language indicates plurality. One is to add the plural marker *-gun* to the NP. The other involves indication plurality by means of reduplication of the noun stem. Moreover, plurality of subject is also indicated by means of attaching the plural marker *-gun* to finite verbs although it is not obligatory.

Besides, in some cases, the plural marker that is attached to the object noun like in the following example indicates that the subject of sentence is plural.

(19) Tangiku & Paklina (2008: 24)

hud-yun, p^hχa-yun fur-gavr-d
that-PL REFL-name-PL say-NEG-IND
'They did not say their name'

In this study, I discussed the possibility that the plural marker *-gun* affects distributive reading.